

特集 この人に聞きたい

中学校教育に望むこと

将棋棋士

羽生 善治 先生



羽生 善治（はぶ よしはる）先生（略歴）

一九七〇年 埼玉県所沢市生まれ、幼稚園時代に東京都八王子市に移住

一九七七年 小学校一年生のとき、同級生から将棋を教わる

一九七八年 小学二年生で将棋道場「八王子将棋クラブ」の「第一回夏休み小中学生将棋大会」で大会デビュー。以降毎週末に同道場に通う。

一九八五年 四段に昇段し、史上三人目の中学生プロ棋士となる

一九八九年 竜王位の初タイトルを獲得

一九九六年 将棋界初の当時の全七タイトル（竜王・名人・王位・王座・棋王・王将・棋聖）独占を達成

二〇一二年 史上五人目の通算一二〇〇勝を史上最年少・史上最速・史上最高率で達成

二〇一七年 永世竜王の獲得により、初の永世七冠（永世竜王・十九世名人・永世王位・名誉王座・永世棋王・永世王将・永世棋聖）を達成

二〇一八年 将棋棋士として、初の国民栄誉賞を授与される

二〇一九年 一四三三勝の通算勝利数により通算勝利数歴代単独一位となる

編集部 全国の公立中学校の校長は約一万人いるんですけども、その先生方に向けて発行している「中学校」という機関誌の特集で、毎年、各界の著名人お一人にインタビューさせていただいています。今年はぜひ羽生先生にということでお願いした次第です。よろしくお願いいたします。

お子さんの頃のお話から伺えればと思うんですが、どんな子供時代を過ごされてきたんでしょうか。

羽生 中学時代ということですか。
編集部 そうですね。

羽生 将棋の棋士を目指したというか、養成機関に入ったのが小学校六年生で、中学生の頃からは、本格的に将棋のプロの道を目指しながら学校にも通っていました。例会というのが月に二回あって、それは平日に行われるので、その二日間は休むんですけれども、それ以外は普



通に学校に通うという日々でした。もちろん将棋の方になり重きを置いていたんですけども、一年生のときには部活もやっていたぐらいで、そっちの生活も普通に過ごしていたというところですかね。

編集部 部活動は何部に入られていたんですか。

羽生 卓球部に入っていました。たまたまそのときに子供の中で流行っていたので、面白いなと思ってやっていたんですけども、だんだん将棋の方が忙しくなってしまうので、疎遠になって一年でやめてしまいました。

編集部 中学校の教科の勉強ですと、得意だったのはどんな教科でしたか。

羽生 数学が一番好きで、得意というほどでもないですけども、答えがすつと出るところが面白かったです。

編集部 子供の頃、影響を受けたことは何かありますか。将棋の道に入るところもありますし、中学校時代にこんな人と出会ったというようなことはありませんか。

羽生 卓球を始めるきっかけのようなものは、小学校のときに図工の先生が放課後に子供たちを集めてやっていたんですね。本格的なのじゃなくて、図工の作業台みたいな

ものにネットをつくって。それで面白いなと思って始めたので、そういう影響はあったと思います。

編集部 中学校のときはもう将棋の方に行こうというお気持ちだったというお話ですけれども、そもそも、一番のきっかけは、何だったのでしょうか。

羽生 最初は、小学校一年生のときに同級生の友達に教わったのがきっかけです。でも、野球をやったりトランプをやったりラジコンをやったりという遊びの中の一つとして将棋もあったということですね。それから一年ぐらい経ってから、今度は子供将棋大会というのが地元で行われたので、それに参加してから本格的にというか、週に一回ぐらいクラブに通って熱中するようになったということです。

小学校六年生の秋に養成機関に入る試験を受けて、中学生になった段階ではプロを目指してやっていたという形です。ただ、義務教育中ですので、普通に学校の方にも通いつつ、将棋の勉強とか研究みたいなものもやって、二つ同時にこなしていく、そういう生活でした。

編集部 最初お友達から将棋を教わったというか、やった

とき、「これだ」みたいなのはあったんですか。

羽生 最初は回り将棋とか挟み将棋で、ちゃんとしたというか、本将棋ではなかったなので、そんなにすぐに熱中したという感じではなかったんですけども、やっていくうちに少しずつ、これは面白いなと思うようになったといういきさつはあります。

編集部 どの辺が熱中していくきっかけというか要素だったんですか。

羽生 一つははっきりと勝負がつくところと、しばらくやっても全然コツが分からなかったというところが面白かったんです。分かってしまうと興味が薄れるということがあるんですけども、そういうのがなかったので熱中したという面と、将棋のいいところは、たまにちょこっとだけ前進できるというところがあるんですよ。何でもいんですけれども、ちょっと困いを覚えたとか作戦を覚えたとか、そういううちよつとずつの前進があるので、そこが自分にとっては面白かったところだと思います。

編集部 ということは、なかなか簡単に獲得できないからこそ、逆に熱中していったという感じですかね。

羽生 間違いないそうですね。初めて道場に通ったときに認定されたのが一五級でしたけれども、最初の二か月か三か月は道場で一回も勝てなくて、本当の初心者というか、ルールだけしか知らなかったという感じです。あまりに駄目なので、席主の人が見るに見かねてこれを読んだ方がいんじゃないかと、雑誌とか本をくれました。

編集部 ずっと最初は勝てなかったのですか。

羽生 全然。

編集部 負けず嫌いというか、勝てないから悔しいというのが強かったですか。

羽生 いや、その当時はうちは町から離れたところに住んでいたので、週に一回、市街に出て両親が買い物をして、いる間の三時間ぐらいしかその道場で将棋を指せなくて、勝ち負けよりも、とにかくいっぱい指したいという、そっちのほうを焦っていました。

編集部 将棋に熱中して、中学校を卒業する頃になると本格的に養成機関に入られることになるわけですか。

羽生 奨励会に入会したのが小学校六年生の秋で、奨励会というのは六級から始まって三段まであるんですけれど

も、四段に昇段すると一人前のプロとして認められるんですね。だから、四段になれば棋士になるんですけれども、それが中学三年の十二月だったので、中三の十二月からは一応社会人というか、棋士になりました。勤労中学生ということですね。中三で働いていました。

編集部 プロということは、中三で賞金みたいなものもらうわけですか。

羽生 もちろんそうです。給料みたいなものとか対局料みたいなものはあります。なりたてですから大したことはないですけども、中学生としては大変なことというか、そういう感じでした。

編集部 中学三年生で初めて賞金なり給料なりもらったときはどんな感じだったんですか。

羽生 その場ですぐもらうという形ではないので、いまいちピンとこなかったというところですね。あと、それをすぐ使う時間があったかというのと、そういう暇もなかったもので、あまり社会人になったという実感はなかったです。ただ、対局で大阪に遠征とか、イベントで地方に行ったりとか、そういうことが増えてくるので、最初のうちは心細

かったというところはあります。

編集部 一人で行かれたのでしょうか。

羽生 もちろん一人で行きます。

編集部 お母さんとかお父さんがついていたりということとは全然なしですか。

羽生 ないです。基本的には、泊まるところを予約して、自分で切符を買って行くという感じなので、最初のうちは心細かったですけれども、だんだん行っているうちに楽しくなってきました。いろいろなところへ行けるので。

編集部 中三でプロになると、学校で授業を受けることが少なくなってきましたか。

羽生 中学時代だと休んでいたのは月に三日間なので、授業が分からなくなるとか、ついていけなくなるといふことはなかったです。高校に入ってからには月に一〇日ぐらい休んでいたもので、そうすると完全に分からなくなりましたけれども、中学時代はまだその程度でした。十二月に棋士になったんですけれども、実際の対局が始まったのは二月からで、二月、三月だけだったので、そんなに大きな影響は中学時代はなかったですね。

編集部 周りの友達とうまくいかないとか、特別な存在として扱われるということもなかったわけですか。

羽生 なかったですし、棋士になったといっても、周りもよく分からなかったというか、私が将棋をやっていたというのの一部の人は知っていたんですけれども、プロを指していたとか、奨励会だとか四段とかいう話は普通の子には何のことだかさっぱり分からないので、「何かになったらしい」程度のほんやりとした感じで、あまり反響はなかったです。

編集部 学校の先生たちからも、将棋の将来を担う卵だといふような特別な扱いというのは全然なかったのですか。

羽生 逆に言うと、平日に休まないといけないので、何で休むのか、毎年担任の先生に説明しないといけない。そこが一番難関でした。義務教育中でもあるのに、体調が悪いわけでもないのに、どうして平日に一日休んで出かけていくのかというのは、中学生ですし、うまく説明するのも難しかったので、生徒手帳にびっしり書いて前日に出していました。

編集部 今中学生を見てみると、いろいろな習い事をして

いる子たちがいますよね。将棋とか囲碁という子もいますし、例えばうちの学校でいうと、カートをやっていて、それで時々休んだりとか。でも、大体皆さん、お母さんとかお父さんが一生懸命説明しに来てくれるんですよ、うちの子はこういうのをやっているのと。でも、今のお話を伺うと、全部自分でやってきたという感じがするんですけども。

羽生 もちろん、親も最初は説明したと思います、面談のときに。ただ、生徒手帳を持っていくのは自分でやらなといけないので。

最近是将棋の世界も、棋士を目指しながら進学も目指すという人が九割ぐらいなので、私の時代は平日に例会をやっていたんですけども、今は例会は土日祝日に振り替えて、勉強のほうにも影響が出ないような形で将棋の道も続けていくというのが主流になってきています。一五年ぐらい前からだんだんそういう形になってきているところですかね。ただ、基本的に一〇代の前半に養成機関に入らないといけないので、両立しないといけないのはみんなが抱える問題です。

編集部 追い込まれてから鮮やかな逆転を生み出していく棋風だということでは有名ですが、どのように集中力とか平常心とか心のコントロールをされているのかということに校長先生方は関心があるんじゃないかと思うんですが、いかがですか。

羽生 形勢がいいときもあるんですけども、悪いときとか接戦のときとか、いろいろな状態があって、そこに心理的な不安とか焦りとか、そういうものも常にあるんですけども、とりあえずどんな状況においても自分なりの最善を尽くす。将棋というのは相手がミスしてくれないと逆転できないので、どんなにそこから頑張ったとしても、間違えてくれないと逆転はできないので、ある種、他力本願的な要素があって、わなを仕掛けて逆転を狙うというよりも、淡々とベストを尽くしてチャンスが来るのを待つというような感じでやるようにしています。

一試合も長いですし、棋士のトータルの生活も長い



ので、あまり瞬間的なことに一喜一憂しないでやっていくことが大事なのかなと。マラソンを走っているような感じなので、瞬間だけちょっと速いとか、ちょっと遅いとか、そういうことはあまり重要ではないです。一日の試合だったら、朝始まって夜の一二時、一時ぐらいまでかかるときがあるのですが、コンスタントに集中して考えられるように、ベースも保ちながら持続していくということを心がけています。

編集部 人生の中でどれぐらいのときにそういう心境になったんですか。初めからですか。

羽生 三〇歳を超えてからです。若いときとか一〇代、二〇代のときは、その辺のばらつきみたいなものが多いですよ。波みたいなの、調子でも体調でも気分でもばらつきが大きいので、ある程度年齢が上がってきてからのほうがそこは安定するようになったと思います。

編集部 そういう中でも、どうしてもここは勝ちたかったのに、うまくいかずに負けてしまったというときは、やっぱりショックがあるんじゃないかなと思うんですけども、自分は淡々とやろうと思ったんだけど大きなショックを受けたときというのは、どうやって乗り越えてこられた

んですか。

羽生 ミスした原因とか負けた要因をきちんと分析するのはすごく大事なことだと思うんですね。しないと同じ過ちをまた繰り返してしまうので、必ず検証はする。検証した後は、すっかり忘れて気持ちを切り替えるというか、過去にあったことは全部どこかに置き去ってしまったって、次に向かっていくということです。

なので、棋士で大事な資質というのは、ある種のいい加減さというか、あまり生真面目過ぎるとつらいんですね。何でかというところ、例えばスポーツだったら、風向きが悪かったとか審判が悪かったとか、いろいろ言い訳ができるじゃないですか。でも、将棋はそれができないので、負けると自分のせいになってしまって、それをどんどん突き詰めて考えると、最後は自己否定にまでなってしまうので、あまりそこを真剣に突き詰め過ぎないで適当に受け流していかないと、結構しんどい世界かなと思っていて、長年やっていく中で、何となく切り替え方のルーティンみたいなものを自分なりにつくっています。

編集部 そのルーティンというのを教えていただいてもい

いですが、どのように切り替えるのですか。

羽生 一番分かりやすいことかというと、よく眠るということですが、うまく眠れるとうまく切り替えられるので、そういう形で切り替えています。

あと、これは経験則で分かるんですけども、夜遅い時間に帰ってきて、夜中の三時とか四時とか、そういう時間になることもあるんですけども、日が昇る前に眠るといのが大事なんですよ。日が昇って朝が来てしまっただと、うまく切り替えられないので、日が昇るまでにちゃんと休むというのがすごく大事です。そんな時間まで起きているのはどうかというそもその問題はありますけども、遅い時間になるものから。日が昇るまでだとリセットしやすいです。

編集部 それは羽生さんということなんですか、それとも人間はということなんですか。

羽生 分からないんですけども、人間の習慣だと思えます、恐らく、多分。科学的な根拠はないですけども。

編集部 遅くなってしまったときは一生懸命早く寝ようとするのですか。

羽生 遅くなって家に帰ってきて、帰ってきた後に反省とか検証をしたとしても、日が昇るまでには眠るようにしています。

編集部 対局が終わるとすぐに、反省、検証をその日のうちにするのですね。

羽生 そうです。反省、検証をその日のうちにやって、その日のうちにその対局を全部完結させてピリオドを打ってしまうんですね。それで眠ってしまった、次の日からは普通どおりというか、通常に戻す。そこでうまく割り切れるかどうかというのが大事なところですよ。

編集部 あまり引きずってしまったり、延々と考えてループの世界に入ってしまう、なかなか眠れなくなったりもしますね。

羽生 頭がさえてきて、逆に眠れなくなってしまうということがあるので。

将棋というのは、感想戦といって、終わったたら対局相手の人と、どこがよかった悪かったという反省会みたいなのをやるんですけども、これはちょっとクールダウンしている意味もあるんです。反省しているところもある

んですけれども、お互いに話をして、上がったテンションを少し下げてクールダウンしているような時間でもありません。

編集部 中学生は生活のリズムというのが大切だと思うんですけども、将棋の世界の毎日の時間の使い方は一般人とちよつと違いますよね。人間というのはどういう過ごし方が大事なんでしょうか。

羽生 なかなか想像しづらいかもしれないですけども、棋士の世界というのは曜日の概念がないんですね。週末が来たから休みということもありませんし、お盆だから休みということもないですし、カレンダーを見て赤い日があったとしても、別に心も動かない。ただ赤いだけ。そんなの全然休みと思つたことがないので。

でも、逆に言うと、ここがオンでここがオフでという切り替えがないので、ある種、自分のペースで組み立てられるという点はいいところかなと思つています。だから、一生懸命やろうと思えば幾らでもできるし、怠けようと思えば幾らでもできてしまうので、そういう怖さというか、自分なりにそういうものをつくっていくことは大事なのかな

とは思いません。

編集部 いろいろな対戦があつて、一年間のスケジュールを、ここにこうあるからといって逆算、組み立てをしていくようなイメージですか。

羽生 いや、実際の対局というか、予選の対局は二週間前までに通知すればいいというルールがあるものですから、逆に言うと、それぐらいまで日程が決まっていなくて、こともよくあるんですね。だから、感覚的にはうっすらと、こういう感じで一年過ごすというのはあるんですけども、その日暮らしというか、結構近いところで日程がぐるぐる変わつて対応していくということが多いので、あまり先のことを見通さないまま、見切り発車ですつとやっていると、いう感じです。

編集部 もうお子さんは大きくなられていると思えますけれども、お子さんが小さい頃は家庭生活は一週間一週間でリズムで動いていると思います。運動会があつたり授業参観日があつたりすると思つていただけます。スケジュールがなかなか決まらないような生活というのはストレスになつたりしないんですか。

羽生 そういふのはなかなか行けなかったり、直前に行けなくなるとか、そういうことはよくあったと思いますし、うちの子供も、本当に小さい頃は気が付いていなかったんですけども、だんだん大きくなって、私が平日に休みということが多いから、周りのお父さんとは違うらしいということに気がき始めたところはあると思います。世間は休みなのに、ずっと出かけっ放しだったり、何時に出かけるか分からないし、何時に帰ってくるか分からないし、すごく変な生活をしているというのは、物心ついた頃からだんだん気が付き始めたと思います。

編集部 お子さんも将棋には関心があるんですか。

羽生 いや、ルールも分かるかどうかぐらいのレベルなので、そんなに関心はないですかね。将棋よりも、Wiiとか、ああいう方が好きです。昔はマリオカートとかやっていました。

編集部 将棋の世界ではずっとトップでいらっしやいますけど、ずっとトップでいるというのとはつらいこともあるんじゃないかなと思います。注目を浴び続ける時間が長いと思うんですが、ずっとトップでいることで努力しているこ

ととか、秘訣というか、自分なりのやっていらっしやることを教えていただけますか。

羽生 どんどん将棋の戦術も変わっていくので、それに合わせて自分自身も変化して対応していかなければいけないということは常に思っていて、そのときの流行とかトレンドというものがあるので、それをどういうふうに捉えるかということと、もう一つは、それを自分なりの個性としていかに生かすか、その二つは常に考えている感じですよ。流行そのものを全部常に追いかけるというわけではなくて、どういふものが流行っていて、それに対して自分のスタイルとか個性がどういふふうにしたらうまく生かせるのかというふうなことはよく考えています。

編集部 時代の変化というか、そういうものと自分を合わせていって、自分を常にバージョンアップしていくというか、リセットしていかなきやいけないので、なかなか大変なんじゃないかなと思います。我々学校の世界だと、他の世界からいろいろ刺激を受けたり本を読んだり、いろいろなことを学ぼう、学ばなきやいけないと思っているわけですけども、どんな形でそういうことを学ぼうとされて

いるんですか。

羽生 将棋の世界においては、いろいろな人がいろいろなアイディアを出すので、そういうものを見て参考にして勉強するところもありますが、どうしても将棋の世界だと、将棋の世界だけの特有の考え方とか発想とか習慣みたいなものが知らず知らずのうちにしみついていることがあるので、それとはちよつと離れた発想とか考え方みたいなものをほかの世界の人たちから取り入れていくようにしています。

編集部 いろいろな世界のものとか触れ合うとか接するというのは、将棋の指し方とか考え方に影響するんですか。



羽生 指し方というよりは、メンタルの部分とか、そういうところでの影響のほうが大きいですね。将棋の技術とは直結しないことが多いですけれども、煮詰まったときにどういうふうに打開するかとか、いい状態をいかに持続させるかとか、時代

の流れをどういうふうに読むかとか、そういうところで他の世界の人の捉え方というのはかなり参考になることがあります。

編集部 できるだけいろいろな世界の人と接しようと。

羽生 ありがたいことに、そういう機会がわりとある世界というか、そういう機会に恵まれているところはあるのかなと思っっていますので、そういう機会を大切にしています。

編集部 少し教育のお話も伺おうと思います。

今、学校では、知識とか理解ということとともに、思考力だとか判断力だとか表現力を大事にしていかななくてはいけないと考え、各校長は取り組んでいるわけですが、将棋が発想力とか思考力とか判断力を高めていくとか、どういうところで教育に役に立つというか、関わっていただくうとお考えになりますか。

羽生 実は、将棋のときに考えている思考方法とか発想方法は日常ではあまり使っていないんです。使うとすごく理屈っぽくなって、日常生活にいろいろ支障を来すので。

編集部 何手も先を読んで。

羽生 読み過ぎると、かえってよくないということがあるので、日常は結構だらけているというか、少し緩めてやっているというか、突き詰めずにやっています。ただ、体系的な知識の積み上げをつくって、応用とか判断とか発想の幅を広げるといっては、ほかのジャンルとやっていることは根本的なところでは同じなのかなと考えています。

編集部 初めに基本的な体系があつて、それとなく全体をうまく理解して、発想とか判断、応用をしていく、そこにつなげていくということですよ。だから、初めのベースみたいな基本的なものや体系的な理解というのが大事だと**羽生** すごく大事だと思います。将棋の世界でいうと、例えばアマチュア初段ぐらいいまでだったら、本を読んだり実戦で指したりというところで基礎が身に付けられるんですけども、もうちょっと高度なことというか、例えばアマチュア四、五段とかプロを目指すような感じになつてくると、知識だけじゃなくて、もうちょっと考え方そのものをうまく誰かに教わらないといけないところがあるんですね。だから、そのうまく誰かに教わるというところで、いいタイミングでいい人に出会えるかどうかという

のはすごく大事なところです。もちろん、そこで切磋琢磨してくれるライバルがいるかどうかとか、そういうことも大事ですけれども、応用していくところでは誰かに教わるというのが大事なことだと思います。

編集部 出会いは大事ということですか。

羽生 そうだと思います。

編集部 どなたがキーマンだったんですか。

羽生 たくさんいるんですけども、将棋の世界というのは、実は師匠はあまり直接的には教えてくれないんですよ。結構職人さんの世界なので、直接教えてくれるということはあまりないんですけども、例えば同門の兄弟子が面倒を見てくれたりとか、そういうことはあります。

編集部 今、我々教育の世界も、ICT機器の活用とか、コンピュータが随分入ってきて、このコロナの状況でもオンライン授業ということが随分言われるようになってきました。将棋の世界でも、最近はコンピュータを使った将棋だとか研さんといったこともなされているようですけれども、どんなメリットとかデメリットがあるとお考えになっていますか。

羽生 メリットは、いつでもどこでも調べれば、答えじゃないんですけど、一つの優れた意見を出してくれるということ、便利になったところや間違いなくありますね。

デメリットのほうは、どうしてもそういう方向でやると画一的になりやすいとか、似たようなものになりやすいので、そこからどういうふうに分かたりの個性を出していくのかというのが難しくなってきたところがあります。
編集部 御自宅でコンピュータの将棋と向き合うということもあるんですか。

羽生 あります。今、棋士の世界で使っていない人は多分ほとんどいない。少なくとも七、八割の人はソフトを使って研究している、それは当たり前になっているということ、結構進歩が速いので、一年ごとにバージョンアップしてくれて、それは全部無償で公開されているので、それを常に取り入れて分析に使うというのが最近の主流です。

ただ、難しいのは、将棋ソフトは答えらしきものは教えてくれるんですけども、プロセスは教えてくれないんですよ。例えば、一つの局面で調べたら、一億手とか二億手

とか読んでくれるんですけども、順番に、この歩を動かす手、一番、この手、二番、これが何点とか、全部瞬間的になるんですけども、何でこれがいい手なのかというのは、言葉をしやべってくれないので、数字だけで……。

編集部 なぜそう判断してその手にしたかということですよ。

羽生 そうです。五六歩、プラス五〇〇点とか、三六飛車、マイナス二〇〇点とか、何でこれがプラス五〇〇点なのか、何でこれがマイナス二〇〇点なのかということは教えてくれないから、人間なりに解釈していかなきゃいけないということ、その評価が間違っているかもしれないということがあるので……。

編集部 やっぱ間違いがあるわけですか。

羽生 間違いがあるというか、水平線効果という言葉があつて、あるところまではすぐ点数が高いんだけど、突然点数が下がるということがあります。長時間、一時間とか調べれば間違わないと思うんですけども、そういうことをやっている物理的な時間がないので、一時間ずつと考えつ放しということはないので、そういうところで人

間的な判断、解釈して判断するということが求められているということだ。

編集部 この一手で勝率が何%から何%に急に上がったと報道されたりしていますけれども、ああいうのも、どうしてと考えると、そこは機械がやっているんでしようけれども、人間の解釈になつてくるわけですね。

羽生 何%とか何点とか出ているんですけども、将棋のプロの目から見ると、あれはすごく楽観的な数字なんです。例えば、八割勝っているといっても、人間の目から見たら五分五分ということはよくあります。でも、一般には分かりやすい指標なので、それでいいと思うんですけども、感覚と実際の形勢にはちよつと乖離があります。

編集部 指しているときはそういうことを感じるんですか。例えば、二割はあまりよくない手じゃないかというところに突っ込んでいく——突っ込むというか、あえて指すみたいなの。

羽生 いや、逆のことが多くて、自分のほうが不利だと思っていたのが、調べてみたら圧倒的に有利だったケースとかあるんですよ。もう駄目だと思っていたのに、ソフト

にかけると楽勝というような点数を出されて愕然とするところがあるので、そこを判断するところが人間にとってもコンピュータにとっても一番難しいところだと思っています。計算することとか記憶することは得意ですけども、判断することはハードルが高い。最難関だと思います。**編集部** その判断というのは、過去の経験値だけなんです。直感とか、その場の雰囲気とか……。

羽生 人間の場合は、もちろん今までの経験に基づいてやっているということですよ。コンピュータの場合は、最近よく出てくる機械学習といって、とんでもない量の対局数を、一〇〇万局とかそういうのをデータでできるので、それに基づいてということですけども、どういうメカニズムで判断しているかというと、一万ぐらい判断するパラメーターがあつて、それで判断しているんですね。人間は五個か一〇個ぐらいの要素で判断するんですけども。一つ一つの判断の精度は低いので、判断する要素を数多く増やして全体的な精度を上げる、そういうアプローチでやっているみたいです。だから、確率的なアプローチなんです。確率的な精度を上げるためにそういうアルゴリズムを

つくっていくということです。

編集部 我々、これから子供たちに教育をしていく中で、コンピュータだとかデータ処理みたいなのはうまく活用しながらも、判断するのは最後は人であるというところが一番大事な要素になるんですかね。



羽生 学習と推論という話があつて、AIというのは学習した後の推論は人間より優れていると思うんです。画像認識が典型的な例ですけども、例えば、これは犬だとか猫だとか車だとかいう認識は、一〇〇万枚ぐらい画像を学習させれば人間よりも高いパフォーマンスを発揮できるんですけども、問題になるのは、学習していないものに出会ったときにいかに推論を立てるかということです。

例えば、ドローンというのがあつて、小学生でも、ドローンを一〇機ぐらい見たら、これはドローンなのか飛行機なのかヘリコプターなのかという認識はすぐできるようなので、人間の知能の優れているところは、学習しながら

推論を同時に行うことができる、小さいデータで推論をして何かということ当てることができるということ、そこは人間がずっとやり続けなければいけないところ、ある程度データとか知識ができてきて、そういうものが確立されたところは、計算のパワーが違い過ぎるので、AIが席卷してしまうと思うんですけども、未知なものとか、まだデータが少ないものとか、よく分かっていないものに対して、こうなんじゃないかという推論を立てるところが人間の役割だし、知能の優れているところだと思います。

編集部 これからどんな時代になっていく中で、子供たちへの教育ということを考えたときには、羽生先生は何を大事に教育をしていってほしいとお考えになりますか。

羽生 これから先起こることは一つの実験みたいなものだと思っています。どういうことかという、タブレットでも何でもいいんですけども、そういうのを使って学んでいくということになるじゃないですか。それはどういうことかという、解き方とかプロセスを知らないで、答えだけ教わって子供たちが学べるかどうかという問題だと

思っているんです。普通は、先生がいて、こうやって解くんだよと教わって、「ああ、分かった」といってやるんですけれども、問題があつて答えがあつてこうだよと言われて、のみ込みのいい子とか回転の速い子だったら、それだけでどンドン前に進めるのかもしれないですけども、本当にそれで全ての子供が知能とか知識とか教養の底上げができるかどうかというのは、やってみないと分からないところがあるので、実験的な要素も結構大きいんじゃないかなと思つています。

でも、先ほどの話ではないですけども、今あるデータなりいろいろな情報機器を活用することで推論の力を高めていくという方向でやっていけば、これほど恵まれている時代もないんじゃないかなと思つています。

編集部 ある意味、使うべきところはコンピュータとかICTを大いに活用して、推論の力を高めるなり、人としての判断力を高めていくことが、子供たちが将来豊かな人生を送っていく大事なポイントなんでしょうか。

羽生 そうですね。でも、最初は自分で考えてみるというのも大事だと思うんですよ。何か分からないことがあつ

たときに、すぐに検索して調べるんじゃないなくて、検索する前に一回自分で自分なりに考えてから、間違つてもいいから——ここが大事で、間違つてもいいから、そこをまずやってみてから調べる。先に検索して自分で考えるのをやめてしまうと、何となく分かった気になつてしまつて身に付かないということがあるので、最初はまず自分で考えてみるのが大事だと思います。

編集部 今学校は、GIGAスクール構想というので、小学校一年生から一人に一台タブレットを与えようとしているんですね。それだけでなく子供たちは幼児の頃からスマホをいじったりするようになっていて、今先生が言われたように、小さい頃からいろいろなもの、自分でやるよりは、どンドン機械に頼るような生活になっていきかねないなと思つているんですけども、その辺はどうなんですか。

羽生 基本的に、新しい技術というのは全部娯楽によって進んでいるという側面があるので、娯楽に依存し過ぎないということが——ただ、娯楽の要素がないと広まらないので、娯楽で子供のときからやるのはいいんですけども、ちゃんとめりはりをつけて、勉強するときは勉強して

遊ぶときは遊ぶというような、うまく習慣付けをするという事ですよね。子供は放っておくとずっと遊び続けるから、周りの環境次第ということになると思います。

編集部 私は今年六〇歳ですけども、若いときと今では、記憶力とかが当然衰えてくると思うんです。年齢を重ねて、若いときと違ってこういうのは将棋で強みになったということがあれば教えてください。

羽生 将棋というのは、最後まで計算し切れないときは感覚的な判断をすることがあるので、こっちがいい悪いというような漠然とした判別とか、そういうところは経験値は大きいのかなと思ってるのと、もう一つは引き算的なところですよ。ここはもう考える必要がないとか、ここは深く考えたほうがいいとか、そういう足し算ではなくて引き算的なところは経験値は大きいかなと思います。

編集部 私は子供たちに、何か目標をもってやれ、そのために常にワクワク感が必要だと言っているんですが、今の将棋のワクワク感というのを教えていただけたらと思います。

羽生 最近の将棋というのは、さっきソフトの影響があ

ると言いましたけれども、ソフトの目から見ると、人間にとつての古いとか新しいという概念がないんですね。だから、最近の将棋というのは、実は昭和の時代にはやっていた手もよく出てくるんです。もうこれは流行が終わってしまつたので駄目だと言われていた形がまたリバイバルされているというところがあって、今、時系列が混ざっているような状況で将棋が変わっているんで、そこは非常に面白いなと思って取り組んでいます。

編集部 先ほどの間違つてもいいからというのはすごく大事なキーワードだなと思っています。今の子供たちもすぐ答えを求めようとするし、AIもすぐ答えを出してくれるんですよ。でも、人間はそういうふうにして人生が進むわけではないんじゃないかなと思います。私たち教育者はどういうふう子供に授業や教育を通して大事なことを伝えていったり教えていったりいいでしょうか。先生はどう思われますか。

羽生 最適化される世界ももちろんあると思います。医療の世界とかは典型的にそうだと思うんですけども、たくさんのお患者さんが救われたほうがいいし、一人でも多く

の人が亡くならないようにやるのがいいので、そういう世界は最適化でどんどんそういう方向で進んでいくのがいいと思います。

ただ、普通に人間が暮らしていく中で、確率的にあなたはこの道に進んだほうがいいですよとか、こっちに進んだほうがいいですよということばかりやっていくと、すごく味気ない世界に進んでしまうと思うので、そっちに進んでいい世界とそっちに進んではいけない世界との識別というか区別をきちんとつけるということ、もう一つは、言葉がすごく大事だと思ってるんですね。言葉ほど曖昧で奥深い世界はなかなかないので、言葉を磨くということが——もちろん、今もLINEとかで子供たちも日々山ほど言葉を書いていますけれども、うざいとか、決まった言葉しか使わない。そういうことではなくて、言葉の奥深さみたいなものを知っていくことが大事なかなと思っています。

編集部 言葉、その奥深さとか意味、時代によって言葉の捉え方も変わるじゃないですか。繰り返しそういうものに向き合うことが大事なんですか。

羽生 例えば、原宿を歩いているティーンエイジャーの

人たちの言っていることは分かりますよね。でも、その言葉遣いは自分使わないじゃないですか。だけど、そういうのを理解しようということは大事なことなのかなと思っています。

昔から何度もお会いしている英文学者の柳瀬尚紀先生、「フィネガンズ・ウェイク」等を翻訳された英文学者の先生はよく、「日本語というのは捉え切るのが難しいぐらい途方もない奥深さがある」とお話しされました。そういうものがバックグラウンドにあるということは、自分たちが気が付いていない過去からある大きな財産とか遺産なんじゃないかなと思います。

編集部 そうすると、いろいろな言葉を自分で捉え直したときに、このもやもやしているものはこの言葉だななどと感じる感性が大事だと思うんです。そうじゃないとそれが言葉にならない。この言葉なんじゃないかなと結び付かなかったりすると思うんです。子供たちの感性を大事にしていく、感性だけじゃなくて経験でも何でもいいんですけれども、それがいろいろな学習や書物と一緒に言葉になって自分の中に落ちてくる、私はそう思うんですけれども、先



生はどういうふうに思われますか。

羽生 それは本当にそうので、そうやって感性を磨くというのは、結局、様々な感情をいかに呼び起こされるかということだと思っっています。特に子供たちにとつては、新しい経験を

というのはすごく大事なことで、同じことを繰り返していると何も刺激を受けないので、そこから何も感情が沸き起らないんですけれども、新しい経験をするることによって刺激を受けて、言葉とか発想も変わってくるというところがあります。

でも、これを若い人へのメッセージで言うときに気を付けていることがあって、そういうのが大事だと言うと、いきなりシリアに行くてきますとかイラクに行くてきますとか、そういう話になってしまふんですよ、どうしても自分が今まで経験してきたことがなかったとか、知らなかった世界を知るとか見識を広めるというのはすごく大事です

けれども、今の時代の難しいところは、安全を確保しなきゃいけないから、本当は経験したほうがいい様々な経験をする機会が減ってしまったというところが今の時代のかなかなか難しいところですよ。自分が子供の頃は、別にそんなことを意識しなくてもそういうことだらけだから、のほほんとしていてもそういう経験ばかりになるので、別にそういうことを考える必要はなかったんですけれども、今の時代はそういうことをつくってあげないといけないというかも、もちろんディズニールランドへ行くのもいいんですけれども、ディズニールランドだと決まった経験しかできないじゃないですか。そういうことが大事かなと思います。

編集部 先ほど言葉を大事にとおっしゃって、私も思うんですけども、この間、近所の方に回覧板を持っていたら、ベルを鳴らすと、「今、お湯をいただいていますから」と言われたんです。何か久しぶりに聞きたい言葉だなと思って、それを子供たちに言ったら、「お茶ですか」と言われたんですけれども、そういうのを引き継ぐとかか継承というか、広めたいなと思うんですが、どういふことができると思われませんか。

羽生 古典的なものとか文化的なものに触れる機会があれば、自然にそういう機会が増えていくような気はします。日本舞踊の先生とかに聞けば、そういう話もしてくださると思いますし、そういうことが大事なのかなと思いますね。

今の話も典型的なそういうことだと思っただけでも、言葉の意味そのものを直接全部受け止めてしまっただけしか解釈しないというか、その言葉の背景にあるものとか、そこにあるものを学んでいくことが大事になるのかなと思います。

編集部 今のコロナの状況をどのように理解して受け止めていらっしゃるのですか。また、世界を巻き込んだこの状況、この後の世界はどうなるとお考えですか。

羽生 思いもよらなかつたことではあるんですけども、今からちょうど一〇〇年前にスペイン風邪がはやったというところがあるので、全く今まででなかつたことが起こったわけではないということでは、必要以上に恐れる必要はないんじゃないかなとは思っています。でも、これから先何が起こっていくかというのは誰も分からないことなので、様々なニュースとか、今起こっている出来事にはアンテナ

を張り巡らせて見るようにしています。それこそさっきの話じゃないですけども、いろいろな推論を自分なりにしていくということは心がけています。

編集部 自粛期間というのはあつたんですか。

羽生 自粛というか、いわゆる緊急事態宣言があつたときは、遠征の対局は全部できなくなりました。ただ、練習とかは全部ネット上でできるので、それほど大きく、世間一般よりは影響は受けていないのかなと思っっています。もちろん、いろいろな影響が表面化してくるのはこれから先だと思っっていますが。

編集部 では最後に、全国の中学校の校長先生方へ望んでいることや、期待等、何かメッセージをいただければと思います。

羽生 校長先生は、どうしても立場上、いろいろな人からいろいろなることを言われると思います。少し休まれてください（笑声）。いや、本当に。休まないといい仕事をするのは難しいので、休みは大事です。これに尽きます。

編集部 大変ありがたいメッセージをいただきました。今日はお時間をいただいてありがとうございました。